

薬剤師を高校生の「なりたい職業」に

滋賀県病院薬剤師会会長
滋賀医科大学医学部附属病院薬剤部教授・部長
森田 真也 Shin-ya MORITA



毎年、小学生・中学生・高校生の「なりたい職業」について調査が行われ、報道されています。この調査は様々な機関が行っており、それぞれで結果もまちまちではありますが、小学生の「なりたい職業」において、残念ながら薬剤師が上位にランクされることはなかなかありません。しかし、女子では中学生になると、薬剤師が上位に顔を見せるようになります。そして、2023年の高校生の「就きたい職業」に関する調査では、薬剤師は女子で第8位（4.0%）、男子でも第8位（3.6%）、全体で第7位（3.7%）となっています（一般社団法人全国高等学校PTA連合会・㈱リクルート合同調査より）。この調査は、病院薬剤師と薬局薬剤師を区別しているわけではありませんが、全職業のなかでの薬剤師の位置として大健闘ではないかと思っています。また、2005年の高校生に対する同調査では、薬剤師は女子で第9位（3.0%）、男子では10位以下でランク外、全体で第11位（2.5%）という結果でした。このように平成から令和にかけて薬剤師のランクは上昇しています。この間に医薬分業も進み、全国の薬剤師の実直な活動姿勢や、病気の治療や健康の増進への貢献が一般的に評価され、高校生にも好印象を与えているものと思われます。また、薬剤師は、比較的安定した収入の職業であり、出産や育児などのライフステージに合わせて長く続けられる職業というイメージも根付いています。

現在、滋賀県でも病院薬剤師の地域偏在が問題となっており、どのようにして確保するのが課題となっています。大学薬学部を卒業する20代半ばの学生にとって、やはり都市部への就職が魅力的であることが多く、都市部ではない出身地ではない馴染みのない地域へ就職するというのはかなり勇気がいることだと思います。薬剤師が不足している地域への新卒薬剤師の就職には、その地域の高校生が大学薬学部へ進学し、卒業後に地元に戻ってきてもらうことが重要ではないかと考えています。もちろん、地元に戻ってこずに都市部に就職してしまうことも多いと思われますが、一定数は地元に戻ってくることを期待できます。2025年3月卒の大学生に対する調査では、地元就職を希望する学生の割合は62.3%となっています（㈱マイナビ調査より）。この調査は、薬学部の学生のみを対象にしているわけではありませんが、多くの大学生が地元への就職を希望していることが窺えます。さらに、同調査で、地元以外の地方で働いてみたいと思う学生の割合が43.6%にもものぼることが報告されています。この地元以外の地方で働くことを希望する新卒者が向こうから来てくれればよいのですが、この層をターゲットにして病院が採用募集活動を行うことは、なかなか難しく感じます。やはり、地元の高校から薬学部に進学した大学生に、是非地元の病院に就職してくれるようにアピールしていくことが重要ではないでしょうか。そのスタートとして、地方の高校生が大学薬学部へ進学するために、これからもさらに多くの高校生にとって薬剤師が「なりたい職業」となっていくことを期待しています。